

無人島に生きる16人

新潮文庫 400円

明治時代、実際にあった遭難事故の船長体験談。

無人島に 須川邦彦 生きる十六人



明治31年に出航、翌年の5月、日本の漁業調査船「龍睡丸」76トン、2本マストは太平洋上、ミッドウェー島近くで難破・座礁する。ボートに乗り込み、脱出を図った16人は、とても小さな島に漂着する。その島は、誰も住んでいない、木も水もない無人島だった。残された16人は、その島でどのようにして生き残ろうとするのか？ 1年間、生きのびた。

井戸を掘り水の確保、住居を作り、火を熾し、漁具の発明・食糧の調達、見張り櫓の建設等…。生活の合間に熟年の水夫達は「無人島教室」となうって、操船や海図の見方など若い研修生に毎日教えた。

船長を中心に協力し合い、いつか祖国の地を踏むべくして、日々の困難に立ち向かう男達の物語。

漂流モノの大半は、絶望を垣間見るシーンが出てくる。この物語では、とにかく悲壮感が全く無い！

・ 処で、この無人島での共同生活を楽しく暮して行くために船長が作った約束事が極めて示唆に富んでいる。

1つ：島で手に入るもので暮して行く 2つ：出来ない相談を言わない事
3つ：規律正しい生活をする事 4つ：愉快的生活を心掛ける事

以上は、便利過ぎるとも言える現代生活において、精神の健全性を保つ上で、決して無視出来ないものを含んでいると思う。

遭難から1年後、16名は幸運にも日の丸をつけた日本船・的矢丸(政府からのまれた遠洋漁業船・107トン)に救助され、無事、日本の駿河湾女良の港に戻ってきた。

船が遭難する場面から、彼らが無人島でのサバイバル生活を確立していくあたりまでは、描写に緊迫感があふれていて、思わず話に引き込まれてしまう。また、試行錯誤とみんなのアイデアによって手近な素材が便利な道具に化けていくところなどは、読んでいてワクワクする。

この本は、もともと子ども向けに書かれたので、楽しく読みやすい本にするために、実際に起きた出来事をベースにしながらも、そこに多少の誇張や脚色がなされている可能性がある。また、16人も人間がサバイバル生活をする以上、そこに多少の確執などもあったと思いますが、そうした、読者がネガティブに受け止めそうな出来事も、話の中からは注意深く排除されている気がする。

そして、そういう目で見てみると、全体的に話の展開がうますぎると感じられるところもないわけではないのですが、別の見方をすれば、読者がそんな風を感じるくらいにすごい幸運が続いたからこそ、彼らは生き延びられたということなのかもしれません。ギリギリの状況でサバイバルしていた彼らにとって、命を支える条件の一つでも欠けるようなアクシデントがあれば、彼らは生きて無人島を出ることはできなかったであろう。

それと、この本を読んでいて感じたのは、非常事態に置かれた人間集団がどれだけ適切な対応をとれるかは、個々のメンバーの経験や能力はもちろん、やはりリーダーシップの質というものに大きく左右されるのだな、ということでした。

この本は、船長の体験談という形をとっているのですが、船長がメンバーに、どのようなタイミングでどのような指示を与えたか、また、細かな気遣いも含めて、彼らをどのように精神的に掌握していたかもわかりやすく描かれている。

それはともかく、この本のシンプルで生き生きとした文章には、冒険小説を読んでいるようなワクワク感を覚えるし、明治の頃の海の男のたくましさや心意気も伝わってくる。